

いかなる軍隊にも旗は必要
である

ラングレン

神輿（みこし）

「どれどれあーここもう神経までいっちゃってるよね」
マスクの奥でくぐもった声が冷たく光るリノリウムの床に反響している。夏はいいだろうが冬場はもっと暖色系の色にすればいいのにと稲葉は思った。
マスクをした分だけ先生の目の印象が強く感じられる。といっても稲葉は彼女のマスクを外した姿をまじまじと見たことがあるわけではない。診察の時は必ずマスクだったから、自然彼女の稲葉に対する印象は何よりもぱっちりまつげが上を向いたその「目」であった。恐らく最新型のシリコンファイバースカラで上向かせているのであろうかしかしその上向き加減は何かお人形めいた人工感を稲葉に感じさせた。
彼女は稲葉の左手首をとると手首の付け根の骨格に反ってすりとした指先を這わせた。途中ちくりと不穏な痛みが走った。

「先生、実は右手首だけは前から気になっていたのです。握手とかするとき人に見られますからね」
「ええそうですね。これだけ斑状に外皮にまで組織浸食がありますとね。いえねあなただけでは御座いませんよ」
「気のせいかも知れませんがどうもみんなに見られているようで気になっていたのです。いやもちろん冬場はこうして長袖ですからね。そんなに目立ちません。万歳とか、すればまた別ですが。こうしてほら、歩いたりタバコを吸ったりする分にはわかりません」
「でも夏場はね」
「夏も僕は半袖は着ません。気になるものですから、右手」
ええ、と小さくマスクの下から覗くかわいい顎が頷く。
「でもそれ、右手首の話で。ですからこちらに。インターネットで探して。でも」
「でも」
「でもあなたは左腕がまずいという」

先生は右手に持っていた総天然色のレントゲン写真を厳かに、ロシア正教会のイコンのようによくやうやく掲げた。前回初めてこの医院を訪れた時、もう一ヶ月前になるが、その時に奥まった遮蔽されたレントゲン室で撮られたものだ。さながらステンドグラスの様に、裏側から明るい蛍光灯が照射していて稲葉の体内をカラーのシルエットで映し出した。それは前回も見せられたものだったので、彼は前の時感じた、自分の醜い骨格を若い女である先生と並んで眺める羞恥心は薄れていた。

「でもほら ここまで真っ黒でしょう。神経も抜いた方がいいでしょうね」
稲葉は暫し黙した。二人して並んでレントゲン写真を凝視するという沈黙の重さを支えきれなくなったか先生が発言したが、いわばこれは意図的に相手に会話の導線に火をつけさそうという稲葉の作戦であった。何とか最期に一発形勢を盛り返すことが出来るかも知れない！

「右手と一緒に麻酔してやっちゃいましょう。何か問題が？」

稲葉はもじもじして答えた。

「いえ、あの、左手首って特に痛んでないんです。まあよく注意してみればちょっと黒くなつてますし。でも痛くないのを切っちゃうのって。はは。どうかなと」

はは、か。稲葉は自分の笑いがとてもひからびているように感じた。先生は冷ややかに笑った。

「まあ、神経が死んじゃう迄お待ちになってもいいですけど」

形勢は逆転しなかった。稲葉はマスクの陰に浮かんでいる筈のその美しい微笑を想像はしてみたが、あえてマスクの上から其れをじろじろと眺めるといのは無礼な気がして、相変わらずレントゲン写真を見ながらいった。「今日は右手だけにしてもらえますか」ささやかな抵抗。

「左手は来週で」

「そういうことで」

先生は壁際にぬっと立っていた補助看護婦に手術の準備を手配すると引き出しから書類を一枚取り出し、机に向かって何か書き始めた。

「お時間かかりませんよ。大体30分ほどです。保険は効きません。肘から先の処置は美容整形と見なされますし。でも年末に10万円以上の治療費に対しては税金の還付はありますので。健康省に報告義務がありますので教えて下さい。あなたえと年齢は。。。」

「182歳です。でもひさしぶりだなあ。年齢を聞かれるなんて。人間の寿命が延びたので、年齢なんて殆ど意味がないですからね」

医療技術の飛躍的進歩によって人間の寿命は平均180歳にまでのびた。そしてそれに貢献している技術の

が健康省が推進する「人類サイボーグ計画」であった。稲葉も外見は20代の頃を保っていた。しかし動きのスムーズさにおいては生身の人間に勿論かなわない。23年前に両足をサイボーグ義足に替えた後は駅の階段の二段飛ばし登りなどはもう出来なくなった。

稲葉は誰もいない深夜の駅のホームでタバコに火をつけ、慣れない左手で紫の煙をふうっと吐き出すと、じっと左手を見つめて嘆息した。「ああ、これでおれの体のオリジナルはこの左手だけになってしまったのだなあ」稲葉の頭からはそういった思考を書き込むときのマイクロメモリーシリンダが唸る音が微かにしていた。「旧式はやはり音がするなあ。ボーナスが出たら替えよう」

ホーと警笛を鳴らしながら最終列車がホームに滑り込んできた。暖かく温もったシートに背をもたせて稲葉は思った。先月自分が参加していた浅草の三社祭を思い出した。もう神輿は担げないのだなあ。そう思うと稲葉は寂しくなった。

何もわかっていなかった女の子

そう言えば、前にその店に行ったときは女の子と一緒にだった。

日本橋で食事した後、上野まで歩いたものの、とおりこして銀座まで行ってしまった。そしてたまたま以前に一度だけ行ったことがある「ナッシュビル」に入ったのだった。

その夜はカントリーのバンドが入っていて、僕はあまり好きじゃないんだけど一曲だけ知っているイーグルスの曲を演奏した。

「テキーラサンライズ」というカクテルの名前にもあるその曲のことを彼女も知っていた。僕は黒ビールをオーダーした。でも彼女が何を頼んだのかはもう忘れてしまった。座った席の場所だけは憶えているんだけど。

今夜のバンドはデキシーだった。「デキシーって食えない音楽なんだ」僕の連れが曲と曲の狭間に呟いた。「あの人達もたいていは遊園地やデパートで演奏してるんだから」ドラムのリズムにウッドベースが呼応してビートを刻み始める。デキシーはどの曲でも哀しく聞こえる。それは例えば夕闇に暮れ始めた冴えない商店街のアスファルトに長く延びて映った誰かの影のように哀しい。ウッドベースは古びて黒光りし、年老いた馬の背のようだった。

今になって思い出すと、僕は彼女のことを何にもわかっていなかった。僕がどんなに彼女のことを救いたかったのか全くわかっていなかった。僕がどんなに好きだったかを全くわかっていなかった。そして彼女はあたらしい電話番号も住所も教えないまま僕の前から消えてしまった。だから彼女のことは「何にもわかっていなかった女の子」と呼ぶことにした。

もう秋なんだと思います

もう秋なんだなと思います

電車で隣り合わせ

部活の帰り

好きなあの子の手まで50センチ

手を伸ばしたら

たった50センチでもあるし

でもこれは永遠に思える距離でもあり

もしおいらに50センチ分の勇気があったなら

世界を変えてやるのにね

ものさしで計れるほのかな気持ちの分量が

井の頭線のアルミ色にピンクのラインの

先頭車両でがたとと

揺らり揺られてゆきました

もう秋なんだなと思います

それはあの子の制服の半袖が少しだけ寒そうだったので

20000915

旧題「50センチの勇気」改作

痛風におけるビート詩的展開

本日件の南部病院に行って来たが、前日缶ビールを飲んだわりには尿酸値回復で目出たしだったのだが中性脂肪値にチェックが入り飯は誰が作っているんですかと意表を突く質問に健太郎は返答に窮した。私の回答に何故か納得の新任萩原医師。ええいままよ。ほっといてくれ。俺より給料は良いか知らないがな、こんな部屋で爺婆相手に毎日安寧を貪る生活に君は満足するのか。バッファローブランドのDOSV互換機の液晶モニターに薄手のキーボードからエクセルのワークシートに患者のアポを入力して君は楽しいのか。

健太郎は堀医師から担当変わったばかりの萩原医師に鋭い右のフックをお見舞いしてマットに沈めた。奴はよだれを垂らして俺に命乞いをした。俺の赤いタバコ磨いたばかりのリングシューズに頬摺りし、助けて下さいと懇願した。俺はそれを聞かないフリをして無情にもさらに右のアップーをお見舞いした。ざまあねえやおれをあまくみたからよおとといきやがれえへへ。右のクロスなら誰にも負けねえぜ。医者だと威張るならDNAを改編するとかクローン人間を造るとか脳味噌を移植するとか神をも恐れぬことをしたまえ。君たちは市役所の窓口で印鑑証明を発行しているお兄さんと同じだ。やつらはボタンダウンで気楽な服装をしている。指定の用紙に印紙を貼ってくれと言って俺の前の自動販売機を指さす、いや赤のボールペンで「ボールペン」指す。印鑑証明は1500円だから1200円じゃ駄目だと言ってそこの自動販売機で1500円で買ってくれと俺様に言う。俺はリングに突っ伏して鼻から訳の分からぬ液体を訳もなく垂らす萩原医師を見ていた、水族館の厚いガラスの向こうから魚の餌付けを見ているように見ていた、ブラウン管のこちら側からボスニアで異教徒兵士に殺戮される少女を見るように見ていた。それでもあいつは俺様にやられることを内心喜んでいるんだだって毎日毎日訳のわからねえ爺婆におしかけられてそれであいつも切れてたのさおれのような。右のクロスなら負けねえぜいつでもかかってきなあしたのためにうつべしうつべしうつべしうつべし。

その後はあえて説明するのもなんだが、さすがの俺様も話したくはねえ。だって誰だって塀の中の冷や飯なんざくいたくねえやさ隣の房の屈強な黒人に何時襲われるともしらねえし。自慢じゃねえが尻だけは誰にも貸したことがねえ俺。誰にも守るものはある、どんな軍隊にも旗は要るってこった。

(1997年「これがビート小説だ」改作)